新しいまちを創る

シリーズ④

総合文化ホール（アルテピア）新安来庁舎 残響の測定で音にこだわります 景観に配慮した周辺工事が進みます

この連載では、市内で進んでいる3つの大型事業（総合文化ホール・新安来庁舎・富田城跡）の現在の様子や進み具合、今後の予定などをお知らせしています。

▲客席が未設置の状態の大ホール。１階席は段差が設けられ、ステージが見やすくなっています。板材をふんだんに利用した明るい空間です。

音にこだわったホール 残響測定で確認します

４月中旬の夜７時、総合文化ホールの大ホールがライトに照らされています。この日、残響特性と遮音性能を専門家が測定しました。ホール内でスピーカーから音を出し、その響きやホール外への音漏れなどを確認していきます。

同ホールは構想段階から音響にこだわったコンセプトで計画。内装工事の完了後、大・小ホールで述べ５回の測定と調整を予定しています。

測定を担当するヤマハ株式会社空間音響技師の高橋顕吾（けんご）さんは「客席は残響時間に大きな影響を与えます。イスの設置前後で目標どおりの数値になっているかを検査します」と話します。

大ホールの目標残響時間は音楽利用の場合で、満席時～1・9秒（講演会利用の場合は満席時～1・4秒）。今後は、客席設置後や生演奏など、様々な場面を想定した音響の測定が行われます。総合文化ホールは、このようなプロセスを経て音にこだわったホールを目指しています。

現在、総合文化ホールは外観工事を終え、床面や客席の設置など、内装工事が進められています。周辺工事も並行して進めており、安来道路側道からの進入路や駐車場舗装、植栽などが順調に進んでいます。駐車場の舗装はヒートアイランド（反射熱）を抑える保水性のあるもの。オリンピックのマラソンコースにも使われる特殊なものです。周辺の河川や水田からの心地よい風が、そのままアルテピアを包み込むように工夫されています。

建物工事は５月末に完了する予定で、開館は９月９日です。

（左）残響の検査には12面体のスピーカーを使用。（右）壁面には凸凹した音響反射板。

▲北側（国道９号側）から見た新安来庁舎。
庁舎周辺は平板舗装で仕上げられています。

▲植え込みは鋼板で囲われ、
来待石のベンチができます。

鉄のまちや安来市を象徴する庁舎

新安来庁舎の壁面には、鉄のまちをイメージした茶色が基調のタイルが使われています。実際に鉄粉がタイルに使われており、朝晩の太陽の角度や天候によって、その風合いが違って見えます。

庁舎の外構工事も進み、植え込みや車いす駐車場、駐輪場なども着々と工事が進んでいます。庁舎の周り6カ所に設けられた植え込みは、曲線の鋼板に囲まれた不思議な形です。これを上から見ると「シジミ」をイメージした形になっています。その植え込みの中には、市の木であるモミジや竹などを植えています。

木戸川と庁舎との空間にはプロムナード（遊歩道，散策路）が整備されます。市の花であるサクラや、これまで市民広場を見下ろしていたカツラやヒマラヤスギが再び、植え戻されます。木戸川の水面に写る庁舎と樹木のシルエットは、川沿いを歩く人の目を楽しませてくれることでしょう。

内部工事も順調に進み、1階～3階は、床タイルやカーペットなどの仕上げ工事がほぼ完了しています。現在は4階の内装工事を中心に進められています。一部の会議室等には市産材のスギ板を利用し、温かみのある内装に仕上がっています。

工事は5月末に完了予定。その後は、備品の設置や機器の移転整備等を行い、7月31日から新たな庁舎で業務を開始します。

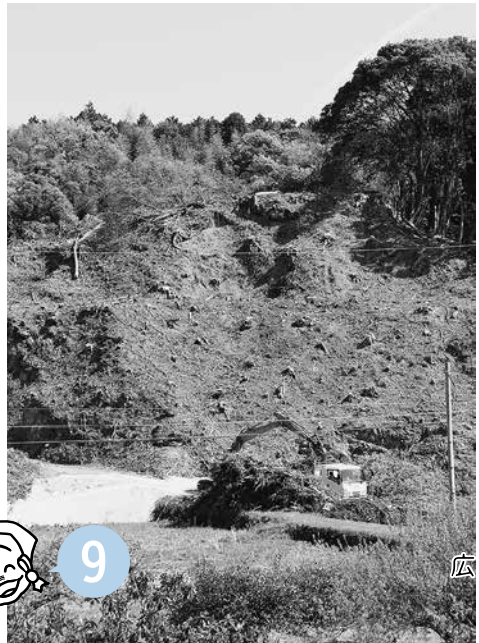
※本文は4月末の様子です

▲木戸川沿いの植樹。

史跡富田城跡整備事業
馬乗馬場の石垣を確認できます

富田城跡の整備は５カ年計画の３年目になります。今年度は、絣センターと歴史資料館背後の千畳平・馬乗馬場（うまのりばば）地区で、戦国時代の風景を復元するための伐採工事とのり面保護工事などを進めていきます。４月～７月は鳥類の繁殖期のため作業を中断し、８月になってから本格的に着手します。現在はこの準備のため、作業道の整備や馬乗馬場周辺ののり面保護の工事を一部、進めています。

馬乗馬場ではこれまで樹木に隠れて見ることができなかった曲輪の石垣が一部、露見しています。また、北側に突き出したこの曲輪は、富田城の防御の一端を垣間見ることができます。



◀広瀬絣センター北側の
道路上から見る馬乗馬場。
上部には石垣が見えます。